

小玉亮子（編著）

『幼小接続期の家族・園・学校』

2017年 東洋館出版社 A5判 142頁 定価（本体2,500円＋税）

林 志妍^{*}

タイトルからも予想できるように、本書は「接続期」における家庭と園、そして学校という三者の関係や役割を主題にしている。「接続期」とは、幼児期から小学校教育へとつながる時期のことであり「小1プロブレム」が台頭した90年代後半より数々の関連書が出されてきた。それらと異なる本書の特徴は、接続期におかれている「子ども」ではなく、もう一方の当事者である「親」や「家族」の経験に注目したところにあるだろう。本書は「接続期の不安にさらされ困難を抱えるのはむしろ親たちではないか」（p.89）と言及する。そうした意味で筆者はタイトルに含まれた三者のうち「家庭」に重きをおきたい。

本書は、お茶の水女子大学と附属学校園との6年間にわたる共同研究「幼小接続期研究プロジェクト」を元に再構成されている。7名の共同研究者と共同研究に賛同した1名の保護者が執筆に携わっており、3部構成、全7章から成る。

第1部の「社会変化と接続期」では、接続期に対するマクロな視点が提示されており、本書を理解する上で重要な2つの柱が提示されている。第1部第1章の「接続期における親と教育-グローバル社会の中で問われる家族と学校-」は、親の位置づけと学校との関係に関する日本の現状を、制度的なレベルから把握し、海外との比較分析を通して課題を提示している。著者は、日本の保幼小のナショナル・カリキュラム規定の検討をもとに、親が、教師との関係において「主体」ではなく「客体」として位置づけられていることを指摘した上で、ヨーロッパでは、親・家族と教師の関係が「パートナーシップ」という、双方向的な関係として議論されているとした。そして、日本においても、親を教育の主体とみなし、親と教師との「パートナーシップ」の形成が検討されるべきではないかという論点を提示している。一方、第2章「教育改革と接続期-『新しい能力』への社会的期待-」は、現代の幼児教育及び親をめぐる複雑な文脈を説明し、作今、接続期が特別な時期として取り上げられるようになった背景には社会的な状況があることを論じる。女性の就労状況の変化、質の高い保育・教育に対する要求、生涯発達の重要な段階として見直される幼児教育、そして、2000年以降の「学力低下」の問題と「家庭の教育力の低下」を背景に、子ども教育の責任に追われている親と家族の状況まで、分析されている。さらに、グローバル化と知識経済の進展と共に浮上する「新しい能力」への要求は、ますます親たちの不安を高めている。これらの社会状況を踏まえて、もはや接続期の問題は単純な「集団適応の問題」ではなく、現代社会の要求する質の高い能力をどのように育成するのか、という不安と結びついていることを示唆している。

第2部の「調査から見える接続期の親たち」では、幼稚園児と小学校1年生の親を対象にした質問紙調査とインタビュー調査から見てきた接続期の親の「危機」の実体を解明する試みである。第2部の第3章「接続期の親たちの期待と不安」では、接続期の親たちが小学校教育に対し、どのような期待と不安を抱えているのかが検討されるが、接続期の親の小学校教育への期待は経年的に高まり、とりわけ「集団活動への期待」が強いことが明らかにされる。教育への期待は、不安とも関連し合って不安感の強い親の方が小学校教育への期待も高いという。著者は、これらの結果から接続期の親の期待と不安は、近年の「学力への志向性」という社会的な変化と結びついていると論じる。4章「接続期の親たちの教育参加」では、接続期の親たちの学校に対する思いが教育参加を切り口に分析されている。この章では、親の教育参加の頻度が高ければ高いほど、親子・親同士・親と学校間のコミュニケーションもより活発になり、子ども

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

に対する理解も深まる反面、教育参加頻度の低い親の方はより教育への不安を感じることが明らかにされる。さらに、教育参加は、親の学校に対する質問や疑問を刺激し、より深いコミュニケーションへと導くことが示唆されている。ここでは、教育参加は親と教師とのパートナーシップを支える可能性をもつものであることが読み取れる。5章「接続期の親たちの教育参加に見る期待と不安」では、親が接続期という「危機」をどのように乗り越えていくのかが、親とのインタビュー調査を元に検討される。ここに、接続期を通じた子どもの人間的な成長、着実な学習の基礎作り、社会の必要とする「新しい能力」につながる興味や経験を意識しながら、教育戦略を立てて対処している親が見えてくる。いわば現代の接続期の親は「全方位的な教育意識」をもち「子どものすべての側面」においてかかわらなければいけないという強い責任感をもっているという。

第3部「接続期の親と教師」は、現場の教師が接続期の親と共に保育と教育を築いてきた実践の話である。第3部では、実践者の教師がどのように接続期の親の危機に向き合っているのかについて、実践者ならではの具体的でリアルな事例とアイデアが表れている。第3部の第6章「親を支える・親に支えられる—子ども理解を中心において—」では、附属幼稚園の園長を務める著者が、親のボランティア活動や保育参加を通して、親の不安に寄り添いながら、保育をつくりあげた実践を紹介している。著者は、親の感じる「不安」は「不満」から「不信」へと発展していくというセオリーを提示した上で、親を親自身として立たせる、いわば「『私』の顔がだせる」という興味深い実践を紹介している。最後の第7章「見え方が壁を越えれば—親の養育観、教師の教育観の変容—」では、附属小学校の教師である著者が1年生の親ボランティアの取り組みや、教育参加の実践を通じて接続期の親と関わった経験を紹介している。著者は、親にとって接続期は1対1の愛情やケアの養育観から共同的養育観へと移っていく「養育観の変容の時期」であり、教師の役割は「養育観や学力観を公共的に変えていく勇気をお互いに育てること」(p.132)であると意味付けている。ひいては、著者にとっても親との関わりは教師としての経験の質と能力を広げ、親との連帯感は子どもの成長を急がせる社会の圧力に耐えられる重要な力になるという。読者は、第3部によって本書の志向する親と園・学校のパートナーシップが具体的にイメージできるだろう。

本書は、大学と附属学校園との共同研究をもとにしていることから全章を通じて、これからの接続期の親と教師との関係に対する一貫した方向性を提示している。それは、本書のタイトルでもある家庭・園・学校の三者がお互いに協力しあい、「子どもと教師と親を主人公とする公共性と創造性に充ちた教育」(p.136)、本書の言葉でいうと親と教師が「パートナー」として教育に参加することである。考えてみると親と教師、家族・園・学校が「共育」というアイデアは、決して「接続期」に限ることではない。全教育段階と機関における課題である。本書の意義は、このような教育における重要な課題を、昨今注目されつつある「接続期」を切り口に提示したことにあると思う。

本を読み終えると、本書の最大の特徴は「親」という取り上げられる対象にあるだけではなく、その捉え方にもあることに気づかされる。従来の「接続期」は、幼児教育から小学校教育へ移行する子どもの衝撃を減らすため、適切で教育的な支援やカリキュラムを探ることに注目していた。それゆえ、子どもの発達や保育・教育的価値が重視され、どうしても接続期を語る範囲が園や学校内に止まっていたと考える。それに対し、本書で語られた「親」と「接続期」は園や学校の外の存在し、昨今の社会状況の様々な脈絡と連動している。読者は、不安や責任を抱えながら奮闘する接続期の親たちに遭遇するだけではなく、彼らの不安の背景にある社会的な圧力や学力観の変容にも気づかされるだろう。

本書で明らかになった接続期の親は、社会から受けた不安や圧力があっても、無力な存在ではなかった。子どもの教育に対する高い意識を持ち、自分で出来ることに専念する彼らは、自分たちの負担を学校や園に求める気はないように見える。が、このような「熱心」な親だけではないだろう。本書でも示されたように階層化された状況は、親の感じる教育的課題に影響する。本書で分析対象となったのは都市部の比較的上流階層の親であったが、今後は、より多様な階層の親が検討され、接続期の親に対する多角的な理解と議論がさらに発展することを期待する。